

高森町時の駅講座

北島新平が遺した 伊那谷の風景



北沢彰利

2026. 8. 29(土)
高森町歴史民俗資料館

北島新平

1926年福島県会津の生まれ
2021年3月5日没(96歳)





1985（昭和59）年8月1日 於：神明荘

信州児童文学会『とうげの旗』
を通しての出会い
北島新平 5 8 歳 北沢 3 0 歳

下伊那に生きる（その19）

絵筆の語り部

童画家 北 島 新 平 先生



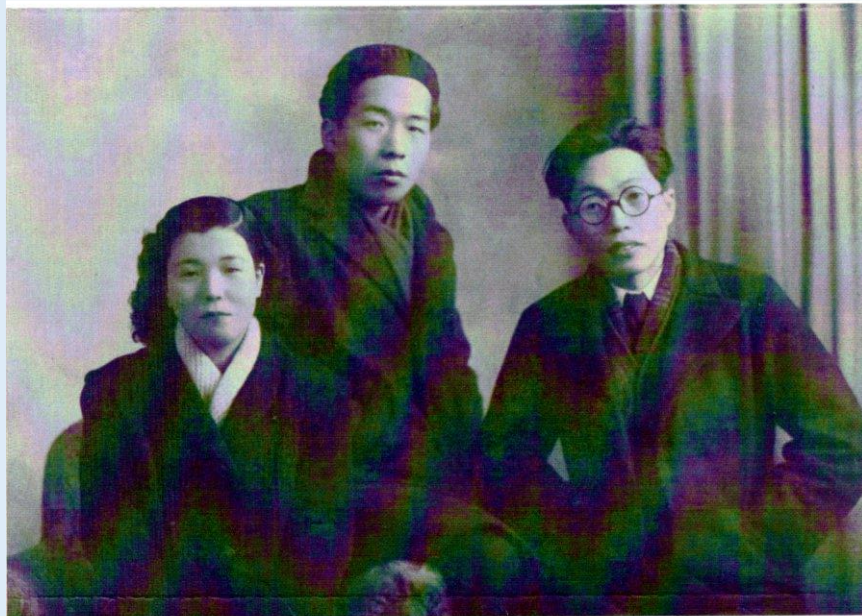
- 昭和の終わり、信州児童文学会『旗に風』編集長となり、表紙絵を依頼
- 教育会誌『下伊那教育』でインタビュー記事を掲載1994年(68,40)



1926年(昭和元年) 1月1日の生まれ

福島県会津本郷の生まれ 三男三女6人兄弟の内の三男

- ・実家は職人を雇って陶器工場を営み、会津本郷焼を生業としていた
- ・小学生の頃から絵が上手で、風景画などを描いて先生方や周りの人から上手だと評判だった
- ・家業を継ぐために東京の商業高校に進む。絵を描くことが好きで、雑誌に投稿して取り上げられていた



1950年(昭和25) 会津若松にて





東京時代

同郷の友人から紹介された

『山の朝』山下大五郎絵

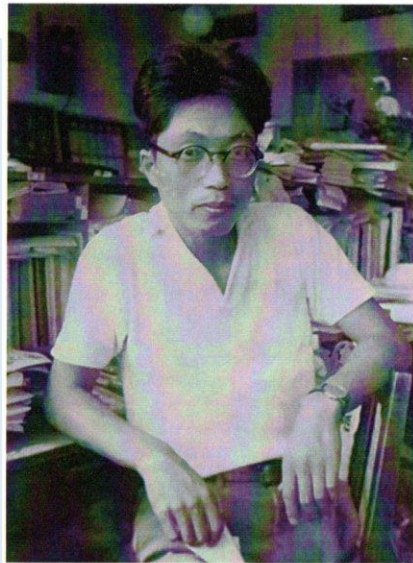
に惹かれる

「山道を集団登校する子どもたちが、山火事を発見し、協力して消し止めるというこの話は、和田村に実際あったことです」

山下大五郎の描く子どもや村人の素朴な姿は、満たされない思いに明け暮れていた若き北島新平の胸に清涼な風をもたらしした。(信州児童文学学会同人 高橋忠治)



木沢小時代（1940年代後半）



遠山中時代（1951年～1957年）

1944年(昭和19年)19歳
会津同郷の詩人 羽曾部忠先生

「信州下伊那の山の学校(木沢小学校)で教員を探しているかどうか」

北島

「行きましょう」

和田小学校に勤めていた石橋和明氏(『絵本山の朝』の作者)を紹介される

北島は、職安から就職口(軍需工場)を示され、徴用寸前

「長野で就職が決まっている」

昭和19年3月末、飯田線平岡駅から20キロ山道を歩いて木沢国民学校へ夜に着く

「この山また山までアメリカも爆弾は落とさないだろう。助かった」



山道を歩いて歩いて四里近く、ようやく木沢国民学校に着く。玄関戸は閉まっていて声をかけても返事がない。その辺をうろうろしていたら、東西吹き抜けの体操場の横から娘さんが顔を出した。挨拶をしたら、そこが校長住宅だった。校長に挨拶、今度転任で下宿など決まっていないと言う。荷物が来るまで、村に一軒だけの宿屋に泊まることになった。

妻花江との出会い 昭和22年4月15日結婚 吊り橋の夫は桜散る土手見下ろしてそこに吾居し (『短歌新調』 1986年5月号より)

妻花江は、歌人として数々の歌を残しています。新平は、南信濃村小道木(ことうき)という20戸弱の小さな集落にある雑貨店に下宿していた。花江はその養女であった。

「君を知ったのは敗戦の年の歳晩である。時が熟して君は北島家の養女花江さんの婿となって入籍した。戦後のことゆえ、会津から父母を呼ぶこともなく、わたしが親代わりであった。遠山谷ではたのもしいまれ人を迎えたので喜んだ。休みの日など肥桶をかついで山畑に働く君を見て、惜しいことだと考える者もあった。・・・君を東京に遊学させようと言ったが、駄目になった。」

池田寿一校長(昭和20年12月着任39歳)



池田寿一は、1906年(明治49年)の生まれである。
木沢小学校へ校長として着任したのは、昭和20年12月、北島新平はすでに着任していた。池田寿一39歳、北島新平20歳の出会いだった。結婚式で親代わりとなった池田が、北島の教師として画家としての才能を頼もしく見ていたことは間違いない。
池田と北島のこの関係が、教師としての北島の立場を保証し、画業への取り組みも支援したのだろう。二人の親交は生涯続くことになる。





霜月祭りとの出会い ライフ ワーク

「観衆も一体となってまつりにとけこんでいる。こんなまつりがあったのか。朝方帰って、すぐに思いだして描いた」(昭和19年12月8日 湯立神楽)
当時は、ほとんどの集落15社で遠山まつりが執り行われていた。

紙も無く原紙も不自由な中で、ガリ版刷りで

昭和22年『山の祭り』

昭和23年『お祭り素描』

(喬木村 勝信正と)

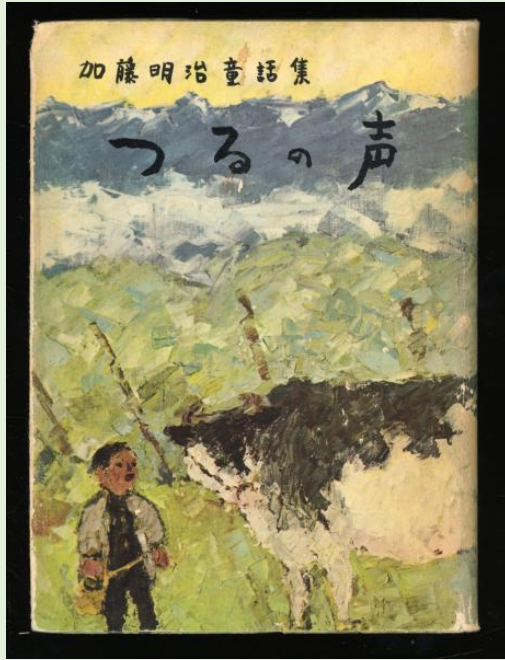
昭和25年『木沢の祭』を

さらに

昭和30年に『繪で見る遠山祭』としてまとめる

信州児童文学会初代会長加藤明治との出会い

北島は、同僚や地域の方の支援を受け、遠山中学校へ転任(昭和26年)後も画業と教師生活を続けるが、「美術教師として広く研鑽を」との勧めで飯田市鼎中学校へ転任(昭和32年)する。その北島を引き受けたのが、加藤明治である。



「つるの声」(北島画)昭和34年で児童文学者協会
新人賞受賞(49歳)

「水つき学校」昭和40年で児童福祉文化賞受賞



代表作「水つき学校」東都書房刊



加藤明治(明治44年5月23日～昭和45年12月30日)

「しゃくなげの花」鼎中学校新聞

「昆虫集め」下伊那教育

「ほんとうの勤務評定」論文
信濃毎日新聞

「リンゴ並木の町」少年少女文学
風土記

昭和31年信州児童文学会参加

生涯の名コンビとなる宮下和男との出会い

北島 35歳 宮下 30歳

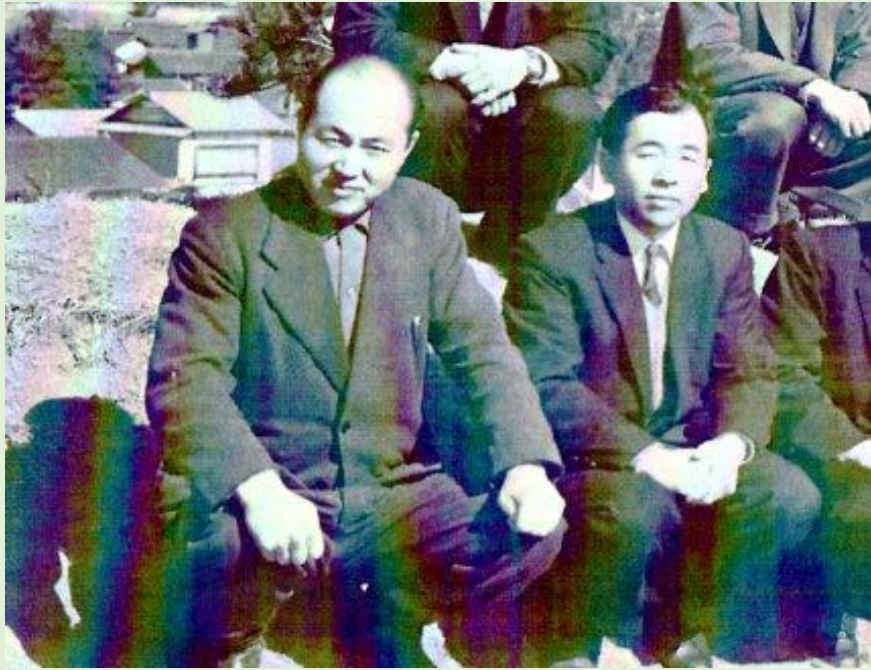
昭和35年 鼎中学校へ赴任 3年前に北島赴任

昭和38年「坂部の冬まつり」(どんぐり堂)石川正臣解説

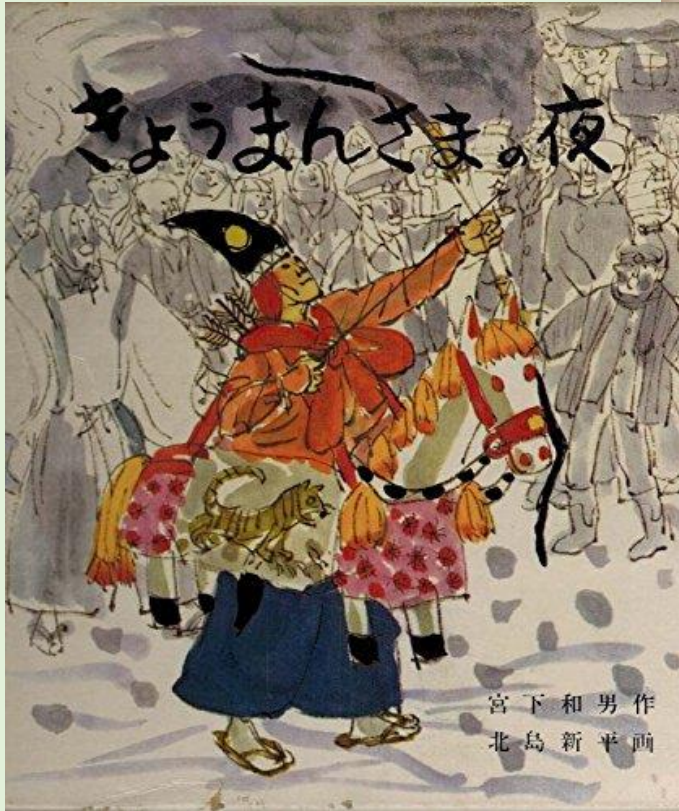
昭和39年「新野の雪まつり」(どんぐり堂)大沢和男解説

昭和42年「きょうまんさまの夜」(福音館書店)

児童文学者協会新人賞



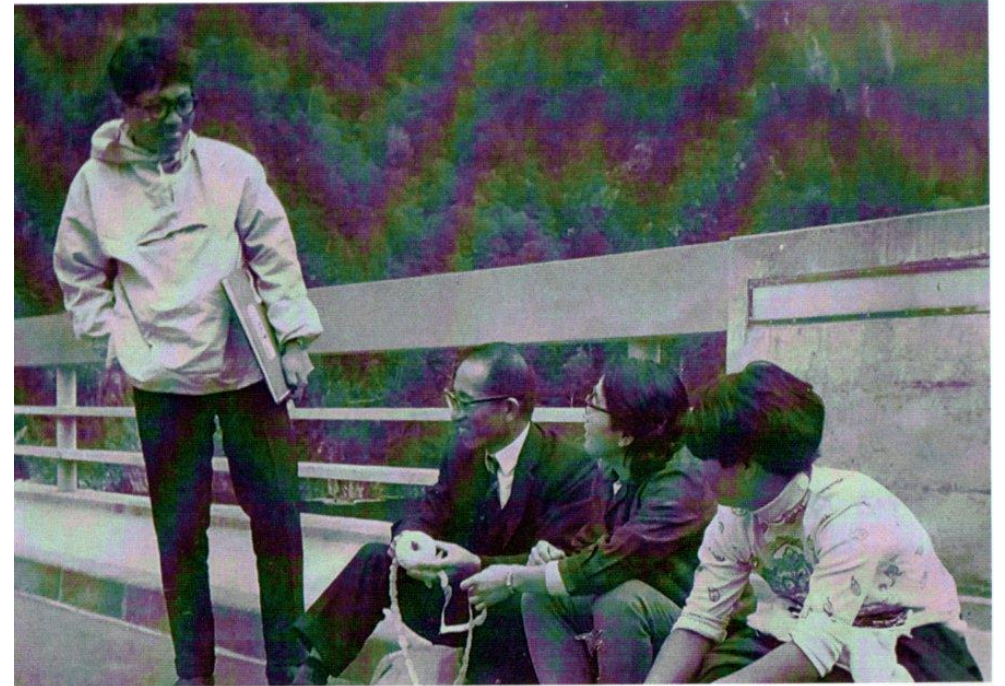
加藤明治校長と宮下和男



単身赴任中の生活

美術教師として勤めながら、絵の勉強に東京に通う

絵の出発が遅い自分が、画業で成功するには、人よりも努力しなければならない。北島は、「家族のことに関わっていたんではいい作品は描けない」と、土日は東京での学習に当てた。講師は田代光、勉強仲間には村上豊がいた。身の丈を越えるスケッチ帳も目標として、修練に努めた。「腕が覚えるまで描く」「45歳を過ぎてしまえば、よい絵は描けない」



1966年（昭和41）白根山販画会

妻花江の歌

下刈に鎌振る腕の疲れ来て別れ住む夫のうかぶたまゆら（ヒムロ）

疲れたと言えれば止めよと夫に言われ好きと蚕を飼いしなつか

最後の赴任校豊丘中学校へ

1964年(昭和39年)～1971年(昭和46年)

豊丘中での北島は、美術教師として授業を持ちながら、自身の絵の修練も重ねていく。宮下和男との祭りシリーズの出版や信毎夕刊に連載された信州児童文学会作家の作品に挿絵を提供したのも、この時期である。学校行事では、スケッチ帳を持ち歩いていたという。

- ・ キャンプ場でのカレー作り
- ・ 『わが母の肖像』
はまみつを作(理論社昭和46年)





当時の同僚には松島信幸先生
豊丘中では、昭和44年～46
年まで記念事業として岩石園の
建設が行われていた



北島新平は、二年間だけ担任を務めた

○美術の時間での事だったと思います。確か版画を彫っていたと思います。私は美術苦手で下手くそでしたが、その時間だけは周りのことなど気にせず必死で彫っていました。気がついたら時間が終わっていました。最後に先生が一言「今の時間で真面目にやっていたのは一人だけだ」と言って終わりました。この言葉を聞いたとき個人名を言われたわけではないのに、とても充実した気持ちと同時にうれしかった。先生は自分の事をしていたのにやはり全体を見ていてくれたのです。

○先生と言えば、黒縁メガネ、低い声で口数が少ない、履き物は下駄か長靴、五十年が経った今でもすぐに思い出せます。美術の先生なのに「箱根の山」を教えてくれて皆で歌った事も思い出します。修学旅行では、美術の先生らしく、しおりと共にスケッチブックも持って短時間で絵も描いて居ました。ユーモアたっぷりの先生を囲んでの「しんぺい会」が卒業後の私の唯一の楽しみでした。



豊丘中学校卒業40周年記念 「しんぺい会」 2008年2月9日 於：湯ヶ洞

「毎日絵を描いていたかった」

1971年(昭和46年)退職を決意して上京

昭和45年の10月になりますか、二日ほど風邪で休んだことがあるんですよ。教員住宅に寝ておりましたね、退職といっても、残すところ十何年、すぐ来てしまう。後は野となれ山となれでね、後悔しないためには、ここで方向転換すべきだろうと、自分に言い聞かせた訳ですよ。十二月になると、人事の希望がある者は言ってこいということになりますね。で、一応、今年限りで辞めたいと思うと、言ったんですよ。木下義正校長でした。

休み明けの1月8日校長に呼ばれて、もう一カ所どこか世話するから行けと、その後で考えたって遅く無いじゃないかと。そう言われるとぐらつくんですね。でも、一時間目の授業をやった後、これまで考えたことが崩れたらおしまいだと、校長のところに戻ったんです。「さっきのもう一カ所の話しは、なかったことにしてください」と。



上京して童画家・写真家として活躍した熊谷元一(1909年～2010年)北島より17歳年上

1966年(昭和41年)まで小学校教員を務めた

写真集代表作に「会地(おうち)村」(1938)、「一年生」(1955)



村のアマチュア写真家によるのびやかな生活の記録

熊谷元一



岩波書店

日本の写真家 17 第2回配本・全40巻+別巻1 定価(本体2300円+税)



1968年(昭和42年)「二ほんのかきのき」(福音館書店)を発行、100万部を超えるロングセラーに

上京を決めた北島を支えた家族

「お金はどうなるのか」と、皆で反対したが結論は出なかった。母は小道木の小さな雑貨店「旭屋商店」を閉じ、小道木から歩いて15分ほどの小学校のある木沢に越し、酒販売の権利と免許を取って販売を考えます。もし東京で上手くいかなくても、父の後ろ盾となるように「旭屋酒店」を始めることになりました。

昭和46年、大学3年生の私は、急いで父と二人で住める安いアパートを探して川口市上青木町で生活を始めることになりました。

平成18年NHK短歌特選となった花江さんの歌に北島は絵を寄せて、それが会場で披露された。

人一人乗せたるバスは

胡桃の実青く光れる谷を走るも



「兎岳をのぞむ」(カラー)

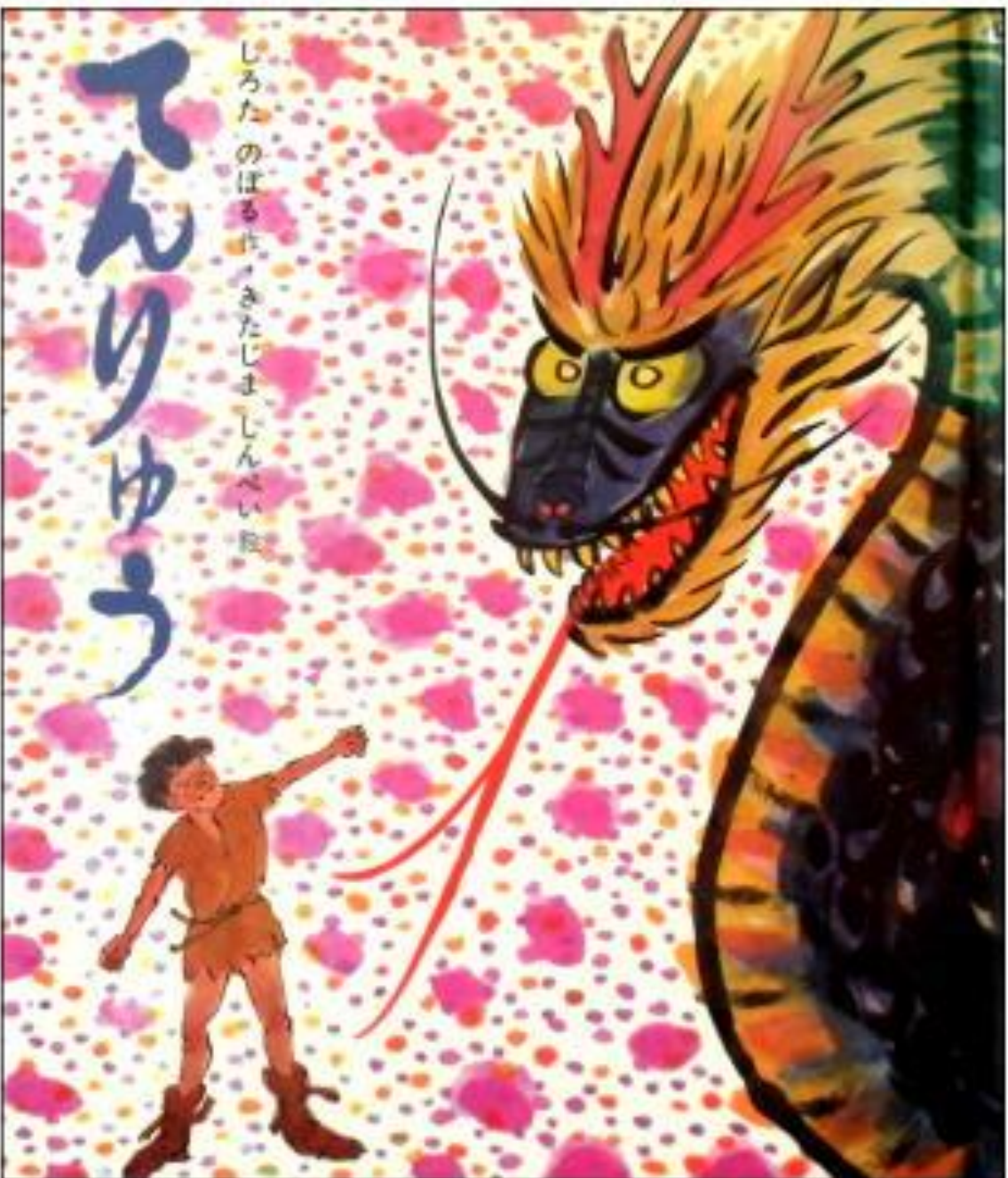
長男達雄さん

長女登美子さん



『てんりゅう』 岩崎書店
代田昇 文
1971年10月

19日卒業式、翌20日一番
の電車で上京
三日ばかり過ぎたとき、出版
社から電話



絵本『てんりゅう』を皮切りとした北島の画業は切れ目無く続き、多くの作品を生み出した。

約600冊の絵本・挿絵作品を出版、絵画・挿絵原稿は今多くの自治体、美術館で保存されている。
信濃町一茶記念館(60)・黒姫童話館(21)

椋鳩十記念館(30)高森町時の駅資料館(21)豊丘村(23)飯田市(43)松川町(3)阿南町(9)中川村(1)天龍村(205)下伊那教育会(1)





木沢自宅のアトリエ 中繁彦氏と



自著が並ぶ自宅の書棚

北島新平が遺した伊那谷の風景

情景

行事

子ども

自然

共生

歴史

祭り

美

妖怪

動き

物語

祭り



歴史がある
神が居る
動きがある
人々が集う



妖怪 動物 笑顔 仲間たち

子ども 老人
囲炉裏火
語り





童画家北島新平によって
彩られた
伊那谷の風景は
末永く遺されていくだろう

それが
「進歩」の中で行き悩む人々に、
人間としての生き方を思い出させ
てくれるものと信じている



今が弥勒の世なるべし
九條殿の世なるべし
平成拾八年(2006年)丙戌(ひのえいぬ)



北島新平は、教師時代、寛容で優れた上司や同僚に恵まれた。温かく尊敬の目を向けた保護者や教え子にも。

当時の教育界には、画業を志す教師を支え応援する雰囲気があったのだ。それなくして童画家北島新平の誕生は無かっただろう。

今、教育現場は窒息状態にある。様々なストレスに潰され、北島のような教師を受け入れ、ましてやその道を後押しする余裕はないだろう。

広い意味で教育の風景を豊かにするのは、北島のような専門性に夢を持つ教師であり、それを咎めることなく見守る同僚たちだ。

社会全体に余裕を取り戻したい。北島を育て童画家の道へと送り出したゆとりある教育界が再現されることを祈っている。



ご静聴ありがとうございました